

# ぼたんとしやくやく

## 明道博

ぼたんとしやくやくは極く近縁のもので分類学上は同属であり、異なつた種に類別されている。しかし少し気をつけて観察すると草姿やその他の形態は大部異なつていて、その最もいちじるしい相異はぼたんが小灌木であるのに対し、しやくやくは草本であつて冬期は地上に木質茎を残すことな

が相前後して入つて来た。その後しばらくは園芸植物としての発展が見られなかつたが、徳川時代に入り次第に花卉としての栽培觀賞が盛んとなり元禄年間には多数の品種を産むに至つた。記録上ではしやくやくの品種は約二四〇、またぼたんでも一五〇ぐらゐになつてゐる。しかしこのことは當時これらの実生がようやく盛んになつたことを示すものであつて、実生個体は一株ずつ皆異なつたものであるからそれらに一つ一つ名称をつけたのでは極めて多数の品種名が生まれる結果になるわけである。したがつてこれらの内、品種として確立し普及したものはそう多くはなかつたものと考えられる。しかしぼたんにしろしやくやくにしる花色においては白・赤・ピンクなどが生まれ、花型では一重の他、半八重、八重などがあらわれた。とくにしやくやくではいわゆる金盞型と称される葯が変化して大きく目立つ花型が好まれた。

### 一 ぼたん

しやくやくの方は華北からシベリアにかけて自生するペオニア・ラクチフロラ（現在は従来のアルピフロラという種名は異名とされている）が原種で、根がダリアのような塊根になる宿根草で、一つの花茎に花二、三数花をつける。花に芳香があり、花色は白が基本である。

原産地の支那やシベリアでは古くから庭園に移され、これらを觀賞用や薬用、食用に供してゐた。またその間に多くの品種を作り上げてゐたことが知られてゐる。これらがわが国に輸入されたのは今より約五〇〇年前で、足利時代にしやくやくとぼたん

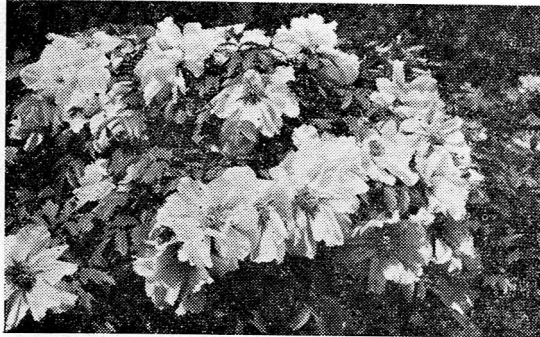
欧州にぼたんがはじめて紹介されたのは英人バンクス氏によつて十八世紀末に英國に輸入された。木本性のしやくやくは欧州には見られないものであり、東洋的な花木としてものではやされた。その後支那から見事な品種が紹介され注目を浴びていたが二十世紀に入つて欧州及び米國での品種改

良がいよいよ盛んになつた。

ぼたんの原種ペオニア・サップルチコーザ（二倍体）の他に木本性の原種が三種ある。これらはいずれも西部支那の原産であつて、ペ・デラバイ、ペ・ルーテア、ペ・ポターニーニ（いずれも二倍体）である。これらは灌木性ではあるが、ぼたんよりは草性の強い種類である。これらの内、ルーテアとポターニーニの黄花種（変種）の二つは花色が美しい黄金色を有する。ルーテアの方は一九〇〇年に発見記載されている。花色は黄金であつてよいが花梗が短く且つ弱く、葉の中に埋つて咲くのが欠点とされていた。しかしこれとぼたんの交配がフランスのルモアン商会と米國のソーンダー氏とによつて見事に成功した。ルモアン商会のものはエスベランスという品種名で一九〇四年開花している。ソーンダー氏のもの

は花がよいよ盛んになつた。

は花がよいよ盛んになつた。



満開のぼたん

花後は花梗から上を摘みとつて結実させない

のはアーゴシーという名をつけられてゐる。これらはすでに本邦にも輸入されてゐて、金鷄とよばれてゐるのは前者である。ポターニーニの黄花変種はその花がトロリスとよばれてゐるので変種名はトロリオイデスとよばれてゐる。よい花で生育も地下茎芽により旺盛であるが、ぼたんと同様の雑種は出来てゐない。

### ぼたんの栽培利用法

ぼたんを植える場所は壤土または砂質壤土で排水のよいところがある。地下水が高いと根が腐ることがある。また逆に余り乾燥がはげしいと生育が鈍り、したがつて花が大きく咲かない。日光は充分受ける場所がよい。

植えつける場合には、木が大きくなつた場合のことを考へて株間一・五呎くらいとして干鳥植えがよいだろう。その時期は札幌を中心とすれば九月下旬がよい。ぼたんの根は比較的横に長く伸びる。それで植え穴は直径五〇センチくらいに掘り、ここに堆肥を与え、それに大豆粕と過燐酸石灰を茶碗に一杯ぐらゐ入れて土とよく混合し、その上に少し土を戻して、その上に植え付けるがよい。植え込みの深さは接木の接合部が土中に少し埋まる程度とする。

開花後は結実させないために花梗から切り取る。そして毎年秋には植え付けの時と同様な肥料を追肥として施す。よい。

ぼたんは比較的寒さには強く、札幌附近で花芽が凍害を受けるということはない。

しかし、冬期木質茎が地上部に残るからこれが雪折れしないように管理してやる必要がある。これには木あるいは竹棒を数本立てて株の頭上で結束してやれば、融雪時の圧に耐えることが出来る。

ぼたんを繁殖しようとするれば取り木か接

木するのが普通であつて、この内苗木生産者は接木によつて行なわれるが、現在ではほとんどしやくやくに砧に接いでいる。いずれにも一得一失があつて、しやくやくに砧の場合には砧の根が長くないから扱い易いし、砧芽が出た場合の識別が容易である。またこれを砧にしたぼたんは木が、共砧の場合ほど大きくならない。寿命は共砧の方が長くやくに砧の方がよい。鉢は一尺一尺二寸鉢が最も普通で、開花期以外の時は鉢毎土中に埋めておくと灌水の労力が省ける。ぼたんにはしばしばボトリチスによる枝枯病が出る。恰度花蕾大きくなりはじめの頃から降雨が頻繁にあつて湿润な時に多い。早春萌芽前石灰硫黄合剤十倍液を、また萌芽後四斗式ポルドウを撒布すると効果がある。ポルドウに替えてクブラビット撒粉でもよい。

## 二 しやくやく

しやくやくは前述のようにベオニア・ラクチフロラ(二倍体)から出発している。これが支那から欧州に紹介されたのは一五四八年と伝えられているが、確実なのは一七七二―三年にパラス氏が齎したものである。この後一八〇〇年代になると、やはり支那から多くの品種及び変種が欧州に紹介されている。例えばブラグランス(一八〇五年)、ホイッティ(一八〇八年)、フメイ(一八一〇年)などで何れも八重咲きの品種である。これらを得て欧州では一八〇〇年代にしやくやくの品種改良が非常に進んだ。これらの品種は一八二九年頃からアメリカにも紹介輸入されて、アメリカでも品種改良が進んだ。彼等の改良の方向は大

輪、八重咲で重ねの厚いこと、芳香の強いこと、花色、花型などであつて、本邦の徳川時代のそれと大部分が違つてい上。いわゆる洋種しやくやくのタイプを作り上げた行つた。一九〇八年の北米コーネル大学のコイト氏の調査では当時五〇〇の品種が記述されている。

このようにしやくやくの品種は本邦のもの、出発は遅いが欧米の品種など合して著しい数に上り、花色では白・ピンク・赤・淡黄色に亘り、花型では宮沢文吾氏によれば一重・金蕊・翁咲・冠咲・手毬咲、半バラ・バラ咲き・半八重・平バラ咲きなど極めて多種多様であるが、それらは殆ど皆ベオニア、ラクチフロラの一原種に出発している。

ベオニア属で草性の原種はこの他二十数種あるが、園芸的にはラクチフロラだけが断然頭角をあらわしているわけである。

本邦のやましやくやく(ヤボニカ)は北支からシベリアに亘りて自生するオバータに近縁のもので花輪が内捲していて大きく展開しない。前者は二倍体であるが、後者は四倍体となつてゐる。欧州に自生するオフィシナリスは北イタリアからスイスに亘りて自生し、これに近縁のフミリスは小形のものでスペインに産し、パラドクサはセントループピオニーと呼ばれてヨーロッパの庭には比較的多いといわれる。またモリスはフランス南部の産といわれ、花首の短い種類である。これらオフィシナリス及びその近縁種は全て四倍体である。これらは一般に早咲きであつて、ぼたんより早く咲く。しやくやくはぼたんに遅れて咲くのが普通である。これらとしやくやくとの交雑は可能であるが普及性のあるよいものが出ていない。またコーカサス地方にはウイ



洋種しやくやく(ラ・チューリップ) 純白で芳香がある強い雨にあうと花首が垂れるから株の周りに支えをつけてやる

しやくやくは大概の土質でよく育つが、最も適當とするのは耕土の深い、肥えた壤土で比較的湿り気が多いところがよい。粘質の埴土でも排水さえよければ結果は非常によい。土は六〇センチくらいに深く耕起して堆肥を充分与える。また油粕または魚粕に木灰などを茶碗に一杯くらい基肥として与えてやる。追肥は開花後及秋、油粕と過磷酸石灰を施す。

植えつけの時期は九月上・中旬がよい。株間は約一呎くらいとつてやり、覆土は芽の上五センチくらいになるようにする。

しやくやくは充分な日光を受けるよりはいくらか蔭を伴う場所がよく生育し、花の色もよく出るといわれる。それで林地の前線や灌木境裁の前植えとして美しいものである。品種により草丈は五〇センチから一二〇センチくらいであるし、花色も変化が多いから各品種三―五株を群植してゆくと非常に美しい。

繁殖は株分けによるのが普通である。その時期は九月上旬がよく、ごぼう根が多数ついているから、芽をつけて根を一本ずつに割つてやる。この際地上の葉は全部取り去つてよい。苗が小さい内は充分大きなよい花が咲かないが、移植後二―三年経過すると次第に見事な花をつけるようになる。植えてから二―三年くらい株分けすることなしにおいても何等衰えることなくよく咲く。

しやくやくで最も普通の病氣はぼたん同様ボトリチス病である。恰度花蕾が大きくなる頃から猖けてを極める。防除はやはり畑に枯葉を残しておかないこと、早春の石灰硫黄合剤と萌芽後のポルドウ液で追つてゆくことになる。

## しやくやくの栽培利用法

ツトマニアナ(四倍体)とムロコセウィッチ(二倍体)の二種が自生している。これらは共に黄色花を有する草性のベオニア属の代表種であるが、これにもしやくやくとの交雑種が出ていない。葉が紐状に細くなつたテヌイホリア(二倍体)は本邦でも時々見受けられるが、これはコーカサス地方に産する。花は深紅色で美しい。草丈が低く五〇センチ位であり、また繁殖力も過度に旺盛でないからロックガーデンなどにはよい。これとしやくやくとの雑種は出来ていて例えば品種スムーシなどは一茎に数花をつけ、芳香を有しロックガーデン用としてよいものである。

以上の他草性のベオニアは欧州及びアジアに約二〇種、アメリカ北西部に二種あるが今のところ何れも園芸的には重きをなしていない。